

二つの看板

取締役社長 山本 志お里

本年夏の事であったが、或る会合で柳田誠二郎氏と同席した事があった。柳田さんは日銀の副総裁や日本航空の社長をされた方で、八十五歳になられる財界の大長老である。私は柳田さんにお目にかかる度にその姿勢の良い事に感服していたので、良い機会と思って姿勢の良い理由をうかがってみた処、柳田さんは子供の頃から書道を習っていたので自然に姿勢が良くなったそうで姿勢を良くして深い呼吸をして字を書く事は健康にも良いという小話をされた。そして「私の母が貴君の店の看板を書いたのですよ。」と云われたので私は飛び上がる程喫驚した。

即座に私は店の看板の事を考えたが、母がと言われたので女流書家でなければならぬ。女流書家とすれば、現在の日本橋本店正面から入ってすぐ右側にかけてある大切な看板を書かれた諸井華畦先生に違いないが、と思ってお話をすると正にその通りであった。

柳田氏は叔母の諸井家へ養子に入られたが、柳田を相続すべき兄君が亡くなられたので再び柳田家に戻られたのだという話をされた。早速電通の調査部に問い合わせた処、

『諸井華畦先生（一八七六—一九三〇）は、足利の旧家柳田和兵衛氏の息女で平戸星洲の門に書を学び二十歳の頃一家をなした。諸

井春畦に嫁し、西川春洞に書を学び、他に華道、詩文にも長じた一代の才女であった。昭和五年一月病没、五十五歳。』等の事を教えてくれた。

関東大震災で当社の日本橋本社は焼け爾来仮建築で営業、昭和三年本建築が落成した。この家屋は残念にも戦災で焼失したが、昭和初年の山本海苔店として写真が残っている。写真で見ると通り全く看板の無い店のだが、大戸の中の上がり框の上の欄間の処に諸井華畦先生の看板額がかかっていた。篆刻はしても超一級の物で、見事な出来栄である。

昭和十九年戦時の企業整備によって、此の看板は当社の子会社の(五)東京海苔販売加工株式会社（本社）の本店に保存された。この為に戦災に遭う事もなく今日店頭を飾っているのである。本社ビルが昭和四十年竣工した時金箔を文字部分に張ったもので、当社の大切な宝である。この看板も華畦先生が書かれてからすでに半世紀余りを経たので、柳田誠二郎氏に是非見に来て欲しい旨お願いしてある。そこで、やがて御母堂の作品を見にこられることと思う。

当社には当社の誇るもう一つの看板がある。
上述の通り戦前の店舗は昭和二十年五月二十五日の空襲で焼失。



終戦後二十年十二月には葺葺張りの床店で開業。二十一年七月二十日初の日本橋祭りの日に三十坪のバラック建てが完成。やがて世の中の秩序も次第に回復しそろそろ本建築が出来る様な時勢になってきたので、昭和二十四年十一月戦後の本建築が竣工した。扱この時に、今迄当社には店頭の看板がなかったが店舗の表示として看板を作ろうという事になり、先ず書家の選定に入った。

当時渉外宣伝方面を担当していた小池善一郎氏が主となって二人の書家を選定、現岩崎常務の父君の岩崎勇次郎氏と私が二人の先生方の中から大池晴嵐先生を決定して、看板の揮毫をお願いした。大池先生は竹の先を細かくした筆を五本括って書かれたと言っていて居られた。全く雄渾な筆致で素晴らしく気力に充ちた書であった。

然しこれだけの雄渾な字を彫るべき看板の板が無いという事で一頓座をきたした。そして専門家に樺の一枚板を探して貰い、ようやくの事に小田原にある事を知らされ、早速岩崎さんと東海道線に乗って見に行き立派な樺の板を手に入れる事が出来た。この篆刻の方法は前述の諸井華畦先生とは逆に樺の木目を生かす為には樺の面を平面にして文字を彫り込んでゆく方法であった。出来上がった看板は美事な書と美事な板で実に堂々たるものであった。処が重量百二十

貫（四百五十キロ）余りもあるので軒へ乗せて耐え得るかどうかが問題となり、建物に鉄の梁を入れ鉄の鎖で後方を引っ張るようなきわぎであった。

此の看板も誠に美事な出来栄であって、やがてはこの書体が当社の書体となり缶もハトロン紙も表示は総て大池先生の書体を充てる事になったのである。

大池晴嵐先生は豊道春海先生に師事され、日展やその他の審査員、日展の評議員等を歴任された。愛知県の方であったので東海書道芸術院会長等をされた方であった。昭和五十二年惜しくも逝去され、誠に残念であった。

この看板は今は大森の倉庫に格納されているが本店九階応接に掲げている、室田氏の旧店舗の油絵でこれを見る事が出来る。そして、毎日々々私達はこの看板の書体を見ながら仕事に励んでいるわけなのである。



昭和31年9月の山本海苔店